

# 八尾歴史物語

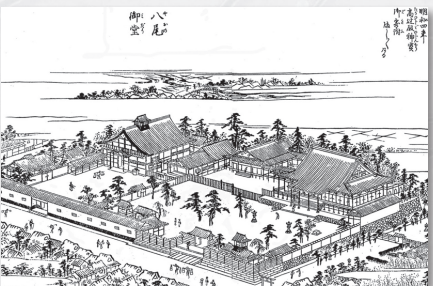
三二巻

続・河内名所図会を訪ねて④ く大信寺の建物その後・前編く

『河内名所図会』には、江戸時代における観光ガイドブックとして、寺院や神社にある建物が数多く紹介されていますが、その多くは、さまざまな歴史を経て現在に残されています。

八尾御坊ごぼうで知られる大信寺がその一つです。今回は、明和4年（1767年）の建立から享和元年（1801年）刊行の『河内名所図会』に描かれるまでの約30年間の大信寺本堂の歴史を振り返ってみましょう。

大信寺の本堂は、天明8年（1788年）の大火で焼けた京都・東本願寺の御影堂ごえいどう（親鸞聖人の像を安置しているお堂）の代わりとして移築されることになりました。本堂は解体され、その建物は長瀬川から淀川を上り京都に運ばれたのです。そして、11年の時を経て寛政11年（1799年）、東本願寺の復興に伴い



▲『河内名所図会』に描かれた大信寺

京都から八尾に再び運ばれ、再建されます。『河内名所図会』に描かれているのは、まさにその直後の姿です（当時の建物や伽藍がらんの様子が詳しく描かれていたことは、市政だより平成23年3月号の「八尾歴史物語 十巻」でご

紹介しています）。

現在の東本願寺の御影堂は、面積では世界最大の木造建築物といわれていますが、天明の大火直前の姿が安永9年（1780年）刊行の『河内名所図会』に描かれており、当時の壮大さを知ることが

できます。

現在の本堂は、昭和18年（1953年）に白アリなどの被害により一部基礎などが損壊したため、昭和42年（1967年）に再建されたものです。損壊した本堂は、再建の際に別の地へ移され、現在もその地に残されています。

【続く】